

朝をひらく

日頃何げなく使っているコトバを見直すことで、意識が劇的に変わることがある。

先日テニスコーチの助言にハッとした。「永田さんの口癖は、『つまり』と『要するに』ですね」。それがどうしたというのか、と心の中でつぶやいた。コーチいわく、学び上手な人とそうでない人がいる。レッスンをしていて、『つまり』と『よつことですか?』『要するに』なのですね?』を連発する人は、上達がしにくいという。

未知との出会い

永田 円了
真国寺住職



ただで理解しようとし、せっかくの真新しい知恵を、そのままに捉えようとしていないというところである。そこで大事なものは、教える側から受け取るコトバをできる限り、『ありのまま』に理解すること、とコーチは結んだ。テニスをしながらこんな哲学が学べるのがすごい。

ありのまま理解する

「人は見たい現実しか見えていない」
確かこれは古代ローマ皇帝ジュリアス・シーザーのコトバ。他の人々の生を、私たちは私たち自身が磨いたレンズで見る。また彼らは私たちの生を彼らのレンズで見る。
「異なる文化にふれても、人は自分の眼鏡をはずせない。だが重要なのはその次だ。すべては相対的だと居直るのではなく、文化の違いを超える普遍的な見方を想定するのでもなく、視点がぐらつき、別のものへと変容するところまで自身を隔てることだ」(米国の文化人類学者クリフォード・ギアツ)
この原稿を書いている最中、大坂なおみ選手が全豪オープンで優勝した。表彰式で「なほみ、おめでとう」と表される、相手が誰であろうと、ファーストネームで呼び合う文化。かたや家族・親族を背負って名字で呼び合う日本文化。この違いを肌で感じたとき私の視点はぐらついた。年の差、男女差、社会的立場の違いなど全てを超えて一人の人間として、相手と関係をもつ考え方。最初にぐらついた20代、そして今大きく変容している自分がいる。
人は新しい概念、そしてそれを表すコトバに出会ったとき、いとも簡単に使い慣れたコトバに置き換えて理解したつもりになる。またそれは異文化のこと、と開き直ることもあろう。私たちの自意識は、いつも既知のものにしがみつき、未知のことに対しては恐れを抱く。このかたい殻を破るにはどうしたらいいのだろうか。

「つまり」「要するに」でまとめるということは、新しい考え方を自分のそれまでの経験の